

第27回 軽井沢22世紀風土フォーラム基本会議

【日 時】 令和4年2月10日（木） 14:00～16:20

【場 所】 軽井沢町役場 第3・第4会議室（Zoom 会議併用のハイブリット形式）

【出席者】 基本会議委員：石山武委員、鈴木幹一委員、須永久委員、
瀬川智子委員、高尾幸男委員、中嶋聞多委員
藤井俊子委員、飯塚真由美委員、高橋浩志委員、
小林広幸委員、瀬原史織委員、鷹取健太委員、
森憲之委員、柳澤陽平委員

内 容

1. 開 会

2. 会長あいさつ

会 長

前回の基本会議は令和3年9月に開催し、11月5日にはシンポジウムを開催させていただいた。

準備及び当日のご尽力有難うございました。

第3期の基本会議は、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況の中、令和2年6月に第1回目をスタートし、それから2年弱経っていますが、現在も新型コロナウイルス感染症の状況が変わらないままであり、基本会議をリモートでの開催等、委員の皆様にはご苦勞をおかけしていると思う。

この2年間の中で、世の中が大きく変化したと感じている。国内では首相が2回代わり、米国大統領も代わり、五輪も2回開催されている。社会的にも、デジタル化、カーボンゼロ等非常に進展し、社会の変化が加速していると感じる。

今期の活動方針を「ウィズコロナ／アフターコロナのまちづくり～新しい働き方・

暮らし方～」としてきたが、大都市から地方へという人の流れもある中で、個人が自分の生き方や価値観を非常に大事にする暮らし方・働き方を実現していると思う。

本日の会議では多様な議題があるが、第3期の締めくくり・総括として、皆さんに活発に議論いただければと思う。

3. 議事

(1)プロジェクトチーム（PT）の活動状況について

座長

我々のプロジェクトチームの活動は、第2期で立ち上がったコミュニティ共創プロジェクトチームから始まり、大日向区と様々な企画を練り、それを継続する形で進めてきた。

大日向区では、令和3年7月11日に中橋先生とA委員による防災講座を開催し、ワークショップなどを行った。「最近、浅間山の話が多くないですか？」というテーマを設定して進めたが、新型コロナウイルスの感染対策等の影響により、人数を絞り込み33名での開催となった。縮小開催ではあったが、第2部のワークショップまで含めてかなりの盛り上がりが見られた。このワークショップを受けて、講師の中村先生から「これだけ機運が盛り上がっているため、出来るだけ早い機会に次の企画をしたいですね。」というお声もあがった。大日向区の皆さんも、それに向けて活動したいという気持ちではあった。

その後は新型コロナウイルス感染症の拡大により、なかなか機会を持てずにいたが、令和3年11月7日に大日向区自主防災主催の「秋の防災ハイキング」が開催された。西部小学校のPTAの声掛けにより、子供達も参加したが、私共のプロジェクトチームは、コロナ禍による人数制限の関係で、私のみオブザーバーのような形で参加させていただいた。非常に天候に恵まれて、歩くのには最適な状況でしたが、高齢者の方や足の不自由な方もいたので、移動が困難な所もあった。開拓時の貴重な話を聞けるなど、中身の濃いような形で展開ができた。参加者の皆さんが結構関心を抱かれていたのが、令和3年8月14日の大雨の際に、高齢者等の避難発令を軽井沢町から発せられ、大日向区もその対象になったため、そのことに関する話をいろいろ聞いたかったということでの参加もあったよ

うに見受けられた。ただ、8月14日のその発令に際しては、区長さんはじめ役員の皆さんが、何軒かのお宅に声をかけたり電話をしたりしたが、大日向区からは、どなたも中央公民館に移動された方はいなかったとのことであった。ここで浮かび上がったことは、「大日向区は大雨による災害はないんだ」という、昔から住んでいる方の強い思い込みであり、その辺りはこれからの課題ではないかと感じた。

今後、プロジェクトチームとして地域の皆さんとの関わり等をどのようにしていくかということで、令和4年1月24日にプロジェクトチームの会議を開催した。地域の皆さんが主体に進めているものに対して、伴走するような形で、アイデアや助言、町の関係部署等へのサポート依頼等の繋がりが、今後も必要になるだろうと感じている。

令和3年12月に行われた茂沢区の防災講座に、大日向区から4名が参加するという動きがあった。また、大日向区分館長からの電話で、今後7月・11月・2月ごろに防災関係のイベントを定期的で開催していきたいという話を聞いた。今年度最後、3月末には、災害時の助け合いマップを作成するような講座まで開きたいという声も出ており、今後に向けた地域の動きが出ているため、新しく住まわれた方達との連携も含めて、新たな方向を探っていければと思っている。

【意見交換】

A委員

大日向地区にフォーカスをしたのは、第2期の際、コミュニティ共創プロジェクトチームということで、多様な住民が新しいコミュニティを作るときにどうしたらいいのか、という議論の中で、浅間山噴火（天変地異）に対して、住民が一致団結することをテーマに生まれた。紆余曲折あったが、防災講座が出来たことが素晴らしいと思う。紆余曲折やコロナなど色々な難しさもありながら、町役場なども決意して、防災係や気象庁の方など様々な連携先も一緒になり、まず1回目の防災講座が開催できたことが大きな成果だと思う。そこから発展して自主防災として自分たちで「年3回防災講座をしよう、助け合いマップを作ろう」と自分たちの声で宣言し、動きだしたことが素晴らしいと思うし、わずか4年の短い時間でこんなに動くとは思っていなかったのが本当に感動した。一重に地域住民の皆さんが、地域や地域住民を愛する心、想いを持っているから生まれた動きだと思う。

改めて軽井沢に住んでいる皆さんの気概の高さや愛情の深さ、おもてなしの心を学ばせていただいた。

会 長

12月15日に茂沢地区で防災講座が開かれたと情報があったが、どこが主催した防災講座だったのか。

座 長

軽井沢町の社会福祉協議会が中心となり、茂沢区と連携して開催した。主催は連名になっているが、長野県社会福祉協議会とまちづくりボランティアセンターとなっている。茂沢地区は大日向地区から見ると南に離れているが、沢沿いにあり、大雨被害等の懸念が強い地域である。また、大日向区との違いは、新しく住まわられている方は少なく、住民は高齢者が中心である。講師は、長野県社会福祉協議会の方が務められた。

A委員

私は3年程前に、軽井沢町の社会福祉協議会が主催の防災講座を担当したことがあり、全地区の自主防災組織の方に参加いただいたが、茂沢地区は過去に風水害で犠牲者を出した地域でもあるため、危機意識が高い。

誰一人残さない、全員助かる地域を自分たちの力で作っていこうという形に繋がっていくと良いと思う。

(2)エリアデザイン検討の進捗について

ファシリテーター

エリアデザインに関しては第2期から取り組んでおり、最初は新軽井沢・中軽井沢の2地区から始まり、第3期からは旧軽井沢・追分・南地区の3地区も本格的に動きだし、現在5つのエリアにて議論を進めているところである。地域住民を中心とした様々な議論をオープンにする地域会議と、その地域会議の進め方等を検討する運営会議の2つの会議体により、議論を進めている。新型コロナウイルスの感染状況に応じて、会議延期をしているエリアもあるが、前向きに議論を進めており、

各地区それぞれの方向性が出始めてきたのではないかと考えている。

■各エリアの検討状況等と今後の方向性

【新軽井沢エリア】

これまで24回運営会議を開催し、まちづくりの方向性や取り組みについて議論してきた。

懇談会という名称で、住民の方に参集いただき、2回の地域会議を開催した。

取り組みの一環として、軽井沢駅前の横町活性のきっかけ作りとしてイベントを開催（令和3年12月4日は延期、令和4年5月に改めて開催する方向で検討中）

これまでの検討を踏まえて、「新軽井沢エリアデザイン会議将来ビジョンの提言」として取りまとめている。

【中軽井沢エリア】

これまでに19回運営会議を開催し、まちづくりの方向性や取り組みについて議論するとともに、外部講師による勉強会などを精力的に実施した。

令和4年2月15日には、「中軽井沢まちづくりシンポジウム&ワークショップ」と題して、イベントの開催を予定している。

これまでの取り組みの中でまちづくり会社が設立され、地域会議やまちづくり会社も活用しながら中軽井沢の活性化に取り組んでいくという方向で議論が進められている。

【追分エリア】

今年度から本格的に始動され、これまで運営会議13回、地域会議11回を開催し、追分のまちづくりの方向性や具体的な取り組み内容等について議論を重ねられた。

これまでの検討を踏まえて、「追分地区まちづくり宣言」や「追分エリアデザインガイドライン」に関する取りまとめをしている。

まだ調整中ではあるが、今年度までの検討を踏まえて、ハード面のまちなみデザインガイドライン策定や、理想に関する取り組みを引き続き推進していくことになっています。

【旧軽井沢エリア】

旧軽井沢では、「旧軽井沢で課題に思うことは何か」という住民アンケートの実施や、運営会議を6回、地域会議を3回開催した。地域会議では、3回ともそれぞれ

れコミュニティが違う人に参加をしていただき、様々な角度から旧軽井沢のまちづくりに関して議論していただいた。

旧軽井沢は、他の地区以上に多様な関係者が存在する地区のため、広く意見を聴取しながら進めている状況である。

【南地区エリア】

これまで運営会議6回、地域会議3回を開催し、長く居住されている層から、新しく移住された層まで多様な方に参加いただき、取り組みの方向性について議論を実施した。

オンライン会議への対応が難しい参加者が多い地区ということもあり、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、現在は会議の開催が出来ていないが、状況を見て会議を再開する予定をしている。

地域会議に多様な方が参加しているため、今後の展開としては、様々な面白い取り組みやアイデアが出てくるような地区になるのではないかと考えている。

【意見交換】

B委員

中軽井沢のエリアデザインについて、2月15日に「中軽井沢まちづくりシンポジウム&ワークショップ」と題するイベント開催を予定されているということだが、参加者は運営会議もしくは地域会議のメンバーだけか。それとも地域の方も含むのか伺いたい。

事務局

地域の方も含む形を想定しているが、新型コロナウイルス感染拡大の状況もあり、今は多くの方を集めることが出来ないため、運営会議の皆さんが中心になって声かけをしてもらい、参加者を集めている。

B委員

個別に声かけということか。中軽井沢地域に在住だが、イベント自体を全く知らなかったため、告知方法について気になった。

事務局

区の役員やNPO法人、軽伸会（中軽井沢地区の青年会）など、団体所属の方を中心に声がけされている。今後、コロナが落ち着いてくれば、参集範囲を広げての開催が見込めると思っている。

B委員

旧軽井沢地区は、他の地区より多様な関係者が存在するということだが、他の地区はあまり多様な種類の人がないということか。旧軽井沢のどういう人たちのことを多様と言っているか具体的にお聞きしたい。

ファシリテーター

軽井沢全体が、別荘の方、古くから住まわれている方、お勤めの方と多様な方がいるが、旧軽井沢は特に旧軽銀座通りのお店のオーナーや、外からお店が入っているところが多く、別荘の方、住民の方、お勤めの方以外にテナントに入っている方、住民でありオーナーとして関わっている方など関わり方が多様である。まちづくりをどうするかということをも住民目線に考えていくことに対して、なかなか利害調整等が簡単ではないという意味である。

C委員

提言がエリアデザインのアウトプットと理解している。中軽井沢でまちづくり会社の話が出ていたが、軽井沢町役場と地域会社と基本会議委員がすべての情報を同期しているということが理想的ではあるが、向かっている方向が一緒であれば、上手く連携できる方法があるのではないかと感じる。

南地区の「面白そうな話になりそう」ということだが、軽井沢は地区ごとに特色があり、地域にいる人や抱えている課題がそれぞれ違う。具体的にどういうアウトプットが出てきそうみたいな話をフォローしていただくと良いと思う。

ファシリテーター

情報が同期されて連携していくということは、まさに今年度感じた課題だと思っている。シンポジウムの振り返りの中で、各地区が連携したり、何か一緒にできた

ら良いという声があった。課題ではあるので、今後のやり方を考えていく必要があると感じる。また、各地区で議論されている中身が明示化されるということは、非常に大事だと思う。

事務局

情報発信は、風土フォーラムのホームページが一種のプラットフォームになっていると思っている。情報が届かない、届きづらい部分については、今後検討していく必要があると思う。

C委員

活動の結果がどうなったかは、意識する必要があると思う。大切な時間を費やすわけなので、しっかりアウトプットをした方が良いと思う。戦略的に物事を考えて、全体的な底上げを図っていき、アウトプットと結果を継続していくと良いと思う。

B委員

確認だが、各エリアデザインの運営会議や地域会議について、各エリアのメンバーが率先して会議日を決めて、自分達で進行しているのか。

ファシリテーター

会議日の決定や進行は、各エリアのメンバーが行っている。なお、青山社中(株)が町から委託を受けて、会議の進め方に関する助言等のサポートを行っており、町役場の都市デザイン室も毎会同席し、議論のサポートをしている。

(3)シンポジウムの振り返りについて

ファシリテーター

11月に開催し、3ヶ月ほど経過しているが、アンケートの集計結果について報告する。参加者のうちアンケートに回答いただいた方は200名弱であり、年齢は60代以上が半数以上、40代50代が4割程度、30代以下が6%程度であった。参加者の構成については、町民が7割、別荘住民が1割、町内への通勤・通学者が7%という構成になっている。来場のきっかけについては、広報かるいざわを見

た人が最も多く、皆さまからのご紹介の方が2番目に多かった。区の見学や風土フォーラムホームページ、SNS等を見て来場した方は、その後が続く形となった。

シンポジウムの満足度は、概ね高評価であり、7割強が満足もしくは大変満足と回答されていた。風土フォーラムへの理解に関しては、大半の方が、ある程度理解できたもしくは大変理解が進んだと答えている。今後の風土フォーラムエリアデザインの取り組みに関しては、約3割がぜひ参加したい、約5割の方は機会があれば参加したいと答えている。

風土フォーラムに取り扱ってほしいテーマや取り組みについては、エリアデザイン関連や景観・環境、まちづくり等の声があった。

【意見交換】

B委員

後日、オンラインで録画を見ることができたと思うが、どれくらい再生されたのか。

事務局

手元に正確な数字を持ち合わせていないが、12月に確認した段階では600回近く再生されていたと思う。

会 長

アンケートの結果やシンポジウム当日の様子を踏まえて感じたことは、まちづくりの議論の輪、広がりをつくることが大事だと感じた。シンポジウムはその最たるものと思う。議論の広がりによって、新しい視点・発見がある。回答結果を見ると、シンポジウムに来てくれた方は、こういう取り組みについて比較的ポジティブであり、評価もされる方が多い。

他方で、風土フォーラムの活動などについて、期待とのギャップがあるようにも感じた。例えば、住民の方の期待は、喫緊の課題への対策の声も少なくなかった。そのあたりのギャップもあるように感じた。

C委員

今の会長のご意見に関連して、風土フォーラムの活動自体の目的が分かっている方とそうでない方で、感想が少しずつ違っているように思う。22世紀風土フォーラムのコンセプトや目的が何か、ということと、シンポジウムに対する期待とのギャップのように感じる。

自身として思ったことは、答えを動きながら作っていくということ。そのあたりで我々もまだ答えを見出していないし、それを町民の皆さんに示していくことも簡単ではない。ただ、朝令暮改でもよいので、「令和4年度の目標はこれだ」というものに対して、シンポジウムでこういうアウトプットを出したということを説明できれば良いと思う。

また、このアンケートを踏まえて、町役場としてどう捉えているのかお聞きしたい。

事務局

色々な受け止め方をされたということに対して、行政として受け止められるものについては受け止めて、それに基づいて何か出来ること等を考えていければ良いのではないかと思う。

D委員

アウトプットしたことによって生まれてきたものだと感じている。どんどん情報発信していくことで実績ができると思う。続けていくことが大事だと感じている。

E委員

このアンケート調査は面白いと思う。集約した数値で表れる部分ではなく、自由記述の内容部分が面白い。この中のデータをテキストマイニングして傾向を見て、利用できたら良いのではないか。

C委員

これだけのアウトプットを引き出したということは、代え難い資産だと思う。

ファシリテーター

今の意見を踏まえてテキストマイニングを活用してみたので、皆さんに共有する。

A委員

あの熱量は凄かった。皆さんほっぺたが高揚しながら興奮した感じで帰っていかれていた。動画の文字おこしのようなことはされるのか。きちんとした形で次の世代への記録が残ればと思う。また、風土フォーラムがなぜ軽井沢にあるのか、どういう存在なのかということについて、まちづくり基本条例に則ったものであるということが、風土フォーラムの冊子等のどこかに記載されていれば、風土フォーラムのことをご存知ない人でも、「なるほど」と分かると思う。文字からすると未来会議のように思われるが、あくまで住民自治のためのものであると伝わると思う。

C委員

そのとおり、基本条例のどこに紐づいていて、こういうことを実施しているということが、伝わりやすくなると思う。

また、参加されて大変満足されている方のコメントは重要で、こういう方がどのように口コミをしてくれるか。広報活動は一般的に必要なと思うが、参加して大変満足した2割の人達の声をどうやって周りの人に言ってもらえるかが、シンポジウムを膨らませていく鍵だと思う。

B委員

風土フォーラムに関心を持った、参加してみたいという人たちが、これからは繋がる人たちになると思う。シンポジウムを開催しましたということについて、町民への報告は何かしらすると思うが、アンケート内容なども、期待感を高める策につながるのではないかと。シンポジウムから3ヶ月経過しているので、何か次の形を発信していければ良いと思う。

会 長

本日出た話は、シンポジウムのフォローアップであり、開催報告のような形で何か必要だと思う。

(4) 軽井沢 22 世紀風土フォーラム未来宣言について

会 長

未来宣言については、これまで基本会議で議論してきた内容やシンポジウムも含めて、活動してきた結果を将来に繋がるものとして包括的に取りまとめたものと、ご理解いただければと思う。

22 世紀風土フォーラムの活動を振り返って、今後のまちづくりの道しるべとなるような未来像を住民の方々に示したい。目指すものは、「軽井沢の質を高める」「ブランドを高める」ということであり、宣言の大きな中身となっている。宣言では、大きく 5 つの項目に焦点を当てた。その一つ一つの趣旨が、住民の方々にも伝え伝わるようにしたいと考えている。

まず (1) について、「自然・歴史・文化が一体となった生活空間」これこそが軽井沢のステータス、軽井沢町の価値だと思う。それらを守っていくために、都市化の波等を踏まえても、節度を守る、品格を保つなど、ルールやあり方を検討するということ。

(2) については、軽井沢の人たちの人的な資源、人材の豊富さ、厚みや多様性というものを活かして、そういう人達が出会って新しく何かを生み出すような場が必要なのではないか。そのようなコミュニティ作りが大事だということ。

(3) と (4) については、軽井沢町は高原都市としてのブランドは既に確立しているが、さらに新たな価値を加えるということ。特に (3) については、ゼロカーボンやカーボンニュートラルというものを踏まえて、低環境負荷型の町へ向かっていくところを強く打ち出した方が良いのではないかとということ。

(4) は、大都市から地方へという流れの中で、地方に新しい価値を作ることが大事であり、住民が暮らしやすいように、先端技術を活用して、観光業にプラスした何か新たな産業を作り出すことが大事ではないか。そのために、厚みの増した軽井沢の人材の活用や、官・民・大学などと広く連携して、議論を進めていくことが大事ではないかとということ。

(5) は、災害に備えた相互扶助を重点に置いたコミュニティ作りに努めるということ。

5 つの軸に絞っているが、これらはお互いに関係の深いものだと思っている。これは風土フォーラムの中で議論してきたものであるということを第 3 期の成果の一

つとして発信をしたい。

【意見交換】

E委員

文章としては完成していると思う。この内容で発信いただくのは異論がない。ただ、発信の仕方として若い人は文章だけだと読まないのではないか。

A委員

E委員のお話はおっしゃる通りだと思う。また、前提として風土フォーラムのそもそもの話が入ると、よりスッと入るのではないか。(まちづくり基本条例含め)そこが入ればばっちりではないか。

C委員

時間と対話の積み重ねになるため、我々はある程度わかるが、情報の発信の仕方によってはE委員の懸念のとおりになる。また、ネガティブに捉える人もいると思う。(分かっているよこんなこと等のご意見)。例えば想定問答(質問と対策)のように、逆の方向から説明を加えるということがあった方が良いのではと思う。

ファシリテーター

内容がよろしければ、発信の仕方については一旦事務局で持ち帰らせていただければと思うがいかがか。

会 長

今、お三方がおっしゃったようなことを盛り込んだ、前段のようなものを出すことについては、検討させていただくということによろしいか。

(5)第3期を振り返って各委員より一言

F委員

プロジェクトチームで動いてきてつくづく思ったが、コロナ禍で制約はされたが、人が動いて意見を交わすということが大事だと感じた第3期であった。厳しい状況

と思うが、引き続きトライしていければと思う。

E委員

コロナ禍で大変な中、会長はじめ皆さま精力的に動いていただいたと思う。印象に残っていることはシンポジウム。高校生コンビとF委員の掛け合い、あのとき確信したのは、風土フォーラムのような場に、若い人たちがもっともっと入ってくれと面白いものができるのではと思う。

G委員

第3期とても勉強になった。日経新聞に軽井沢について「進化する軽井沢、イノベーションの町へ」という記事が連載になっている。移住した子育て世代が存在感をもってまちづくりを、教育環境・住宅価格に魅力、と変化している様子が取り上げられている。変化し続けている軽井沢の実情を把握し、理解して、22世紀風土フォーラムの活動にリンクできればと思う。

B委員

コロナ禍の活動ということだったが、新たな出会いもあり感謝している。シンポジウムという大きな成果・催しがあり、そこに関わることができたことも光栄だった。エリアのことも住んでいる働いている場所以外の課題も見えてきた。活動しきれなかった部分もあるが、そこは反省点。よりよいまちづくりに繋がればと思う。

H委員

第2期で交通関連プロジェクトチームに参加し、今期と合わせてトータル4年参加しているが、できれば第2期の交通の内容が第3期でもいかせればと思っていたが、立ち上げ時点でプロジェクトチームの内容が定まらない中でスタートし、戸惑った部分もあった。紆余曲折ありながら、皆さんで大日向地区をメインとした活動ができ、終わってみれば良い形になったと思うが、時間はかかってしまったように感じる。個人的には、軽井沢に移住したい、別荘を持ちたいという話があったときに、自分はマイナス面を伝えるようにしている。その視点から、この町をもっと変えていけるのではと思っているので、今後活かせるような活動をしていければと思

う。

I 委員

最終的にシンポジウム、未来宣言ができたことは良かった。これからについて、シンポジウムや未来宣言はひとつの手段であり、ここからどう動いたかが重要。未来宣言も意見の表明であるが、表明だけいいのかということそうではない。皆さんも同じ思いであると思う。シンポジウムも150人以上の参加があつて、90名以上のアンケートがあつたことは非常に素晴らしい。まずそこを評価すべき。批判的な意見もあつたが、住民の方がここまで注目されていることは重要。そのあと、ひとつひとつ進めていければと思う。

A 委員

第3期については、大日向地区での自主防災組織について、最終的に自分たちで動き出したことを4年間の中で見ることは本当に良かった。皆さんが伴走されてきた成果だと思う。多様な人を巻き込むということはこれから。軽井沢のまちづくり基本条例が全国でも特殊な点は、定住人口だけではないこと。軽井沢モデルを風土自治にもっていくためには、居住形態が多様な人をどう巻き込んでいくかが、これからのテーマ。シンポジウムについては、軽井沢の地元の高校生が軽井沢の魅力を知らないらしい、ということが分かり、中学生高校生と一緒にまちづくりについて考えていくということで、インパクトのある会になった。これからは、「大好き」、軽井沢が大好きなひとたちのネットワーク・熱量を集めていければ、前向きな議論ができると思う。SDGs、誰一人取り残さないをもうひとつのコミュニティの柱にしていければと思う。風土フォーラムが素晴らしいのは役場の皆さんがいらっしゃること。役場の方は町の中でも様々な役割をされており、子育て現役である方も多し。ソーシャルイノベーションで大事なことは「私」を主語で語ること。風土フォーラムがそういう場になっていくとよい。

C 委員

言いたいことはA委員に言っていた。みんな軽井沢が大好き。また公と私の関わり。従業員が多い企業を動かすことは大変であり、地域も同じだと思う。動

かすには、中心となる人たちがバタバタ動かないとだめ。それぞれの立場において、成果・結果を意識付けして、動いていくということ。

J 委員

第3期後半の一年間という特殊な参加になったが、第2期コミュニティ共創の際に大日向区長を訪ねたことを覚えているが、今では多くの人に関わって、地道な活動でここまでになった。

K 委員

何もわからない中で参加したが、軽井沢の魅力について、生まれてずっと住んできた身としては分からなかった。風土フォーラムを通じて、皆さんからの議論の中で、軽井沢の魅力が自然であるということにも気付いた。周りの仲間の中でも気付いていない人も多い。

D 委員

第2期の途中から委員として参画したが、風土自治は住民主体のまちづくり、住民主体が実践になると難しさを感じる。エリアデザインの中で、横町のマルシェについて、この動きがまさに風土自治ということになると思う。住民主体で動き、行政が側面支援をする。旧軽井沢でもできるといいなと思っている。

L 委員

第3期からプロジェクトチームにも参加させていただいたが、行政とは違う立場で町を考える機会をいただいた。町のことを考えるだけで、これだけ多くの意見があるということも感じた。シンポジウムを通して、世代間の意見の交流や、若い世代の発言が、これだけの威力と魅力を持って、皆さんの心に響くということに感動した。この経験を活かしていきたい。

副会長

シンポジウムは成功だと思った。エリアデザインの運営会議・地域会議の皆さんが別の地域の取り組みが分かったということが一番だったのではと思う。町の立場

で少し話をすると、できることの中でやらないといけないことと、やったほうがよいことがあるが、そこまで時間もお金も人もない。やったほうがよいことを住民が主体となってやっていくということが、風土自治のひとつの目標であるとして進めてきた。今後は事務方に徹するが、町を大きな木に例えると、種をまくのも育てるのも住民、それが促進されるように行政が土づくりをしっかりとやっていきたい。

会 長

まず皆さんに御礼を申し上げたい。個人的な気持ちをお話しすると、軽井沢に関わっているということは、気持ち的にもバランスがとても良い。風土フォーラムはひとつの楽しみ、軽井沢が大好きであるし、皆さんと色々なお話ができることは、私に心の安定をもたらしているということを最後にお伝えしたいと思う。

(6)町長より一言

町 長

会長・委員の皆様、お忙しい中風土フォーラム基本会議運営をいただき、ありがとうございました。

青山社中様、ありがとうございました。風土フォーラムの存在意義について、いつも考えている。委員の皆様は人数も限られている。それをもっと多くの町民、住民に限らず別荘の方も含めて広めていく。それを成していくための場であると、常々考えてきた。発地市庭での会議でも、傍聴者も限られていたが、もっと広げるためにどうしたらいいのか、常々考えてきた。委員の皆様は知識も多く、問題意識も高い人たち。その人たちだけでは、本来の風土フォーラムにはならない。ここからいかに広げていくかが課題であった。そういう意味で、シンポジウムで多くの人に参加いただき、アンケートもいただき、本当にすごいと感じている。暗中模索のところではあるが、基本会議を通して、行政が何かができるというところに直結させていけるのではと考えている。皆さんで考え、議論をしながら、それが今回のシンポジウムによって、多くの皆さんに一気に広がったと感じている。そういう意味では大変良かった。基本会議が輪を広げる役割、アンケートを見ると町民と風土フォーラムのギャップも見えたが、関心を持ってもらったという結果もあった。まずは大きな一歩だったと思う。風土フォーラムの果たした役割は非常に大きいと思

う。

4. 事務連絡

現在、事務局では未来宣言を踏まえ、来期の風土フォーラム運営について検討を進めている。

5. 閉 会